小景異情

室生犀星

作者

室生犀星

明治二十二（一八八九）年～昭和三十七（一九六二）年。詩人・小説家。石川県金沢市裏千日町に生れる。父は小畠弥左衛門吉種で、母は独り住まいの吉種に仕えた女性だが、氏名を特定されるに至っていない。生後間もなく、真言宗雨宝院住職室生真乗の内縁の妻、赤井ハツに引き取られ、ハツの私生児、照道として届けられた。当時、ハツは明治十年生まれのテヱ、十七年生まれの真道を私生児としてもらい受け、育てていた。七歳のとき、室生真乗の養嗣子となり、室生姓となった。九歳のときに、実父吉種が死去し、生母の消息が不明となる。自らの出自、養育環境の苛酷さは、犀星の生涯に、また文学活動に重要な影響を与えることとなった。

明治二十八年、半年遅れて野町尋常小学校に入学。負けず嫌いの性格で教師や養母に反抗する少年であった。一方、養父真乗の慈悲深い性格や、生母への思慕の念から、孤独のうちにも自然を感受する詩心は熟成されていったとみられる。三十五年、金沢市立長町高等小学校を三年で途中退学し、血のつながらない兄、真道の勤める金沢地方裁判所の給仕として働くようになり、ここで文学と接近する契機となった。上司である川越風骨により俳句の手ほどきを受け、俳人藤井紫影が選者を務める「北国新聞」俳句欄に投稿し、しばしば入選する。また北国俳句会の最年少会員として熱心に句作に励んだ。三十九年、小品「河辺の初春」が「文章世界」に掲載。また四十年には「さくら石斑魚に添えて」が雑誌「新声」に児玉花外の選で掲載された。このころには新聞、雑誌に数多く掲載されるようになり、四十二年、北原白秋の「邪宗門」によって詩への情熱が高まると、裁判所の勤めをやめ、「みくに新聞」「石川新聞」の記者となる。文学で身を立てていくことを決意し、四十三年五月に上京。花外や白秋のもとを訪れ、詩作にはげむが、翌年の夏には困窮のうちに金沢に帰郷する。しかし、金沢でも養母との関係、恋人との問題、文学仲間からの中傷から耐えきれず、再び上京する。以後、上京と帰郷を繰り返し、自らの居場所を探し、苦悩する。本教材の「小景異情」はこのような状況を背景としている。

大正二年五月、白秋主宰の雑誌「朱欒」に「小景異情」が掲載される。同誌同月号に萩原朔太郎の詩「みちゆき」（のち「夜汽車」と改題され、「純情小曲集」に収められる）も載っていたが、彼から「今の詩壇では見ることのできない純な真実なもの」と評する熱烈な手紙をもらい、翌年、朔太郎のいる前橋を訪問。生涯つづく交友のきっかけとなる。同年六月、山村暮鳥を加え詩、宗教、音楽の研究を目的とする「人魚詩社」を結成し、雑誌「卓上噴水」を、五年六月には「感情詩社」を結成し、雑誌「感情」を創刊し、新たな詩作運動を進めた。朔太郎の影響を受け、ドスト

エフスキー、トルストイに傾倒し、人道主義的な「愛の詩集」へと詩風が変化した。

六年、養父が亡くなり。幾ばくかの遺産をもとに翌年の一月、第一詩集「愛の詩集」を自費出版し、四月には「新らしい詩とその作り方」を書き下ろしで出版。九月には感情詩社から「抒情小曲集」を出版する。同年、金沢の小学校教師の浅川とみ子と結婚するが、経済的な困難さもあり、出自や幼年期の思いを小説に表すことを決意する。八年には雑誌「中央公論」の編集長の滝田樗陰の高い評価のもと、「幼年時代」「性に眼覚める頃」「或る少女の死まで」を相次いで発表し、新進作家として認められた。その後、多作、濫作の時期があるが、十一年の長男豹太郎の死、翌年の朝子の誕生と関東大震災による金沢移住により作風も沈潜したものとなる。

大正末からは、日本の伝統的な庭や陶磁器などに親しみ、「魚眠洞随筆」「芭蕉襍記」などの随筆集も好んで出版。昭和二年七月の芥川龍之介の自殺に衝撃を受ける。七年の「鉄集」で詩との決別を宣言し萩原朔太郎と応酬するが、さまざまな形で詩は生涯にわたって書き続けられた。九年には「あにいもうと」を発表し、抒情性の色濃い作風から登場人物を多角的に捉える「市井鬼もの」といわれる小説群を描く作家となった。

戦争期には、私小説的な作品、王朝ものに材を得た作品、身辺の自然を描いた作品などを描いたが、戦後、自己の生涯と娘の生き方を描いた「杏っ子」（昭三十二、読売文学賞受賞）で復活。評論「我が愛する詩人の伝記」（昭三十三）、「かげろふの日記遺文」（昭三十四、野間文芸賞受賞）など、注目作を発表し続けた。自らの病を「われはうたへどやぶれかぶれ」で描き出し、肺癌により七十二歳で亡くなった。

作者を解くカギ

萩原朔太郎は「室生犀星の詩」（「日本」昭十七・四、五）で、「新体詩の出発以来、日本の詩は多く七五調や五七調の韻文で書かれて居た。（略）かうした詩形の規約を無視して、心の韻律をそのまま言葉の節奏に移し、大胆奔縦の自由詩で歌つたものは、実に室生犀星であつた。しかもかうした彼の詩篇（「小景異情」など）は、過去の詩に全く類例のない、特殊な魅惑的な音楽節奏に富んでるので、朗々と声をあげて愛吟するに足るものであつた。／さらにまた犀星の新詩業は、過去の文章語で書いた新体詩から、その非時代的な古典性を一掃して、文語詩をそのまま現代語化したことである。実に日本の文語詩は、犀星によつて全くスタイルを一新し、本質上に於て、現代口語詩と同じやうなものになつた。」と論じている。実際には、収録した「小景異情（その二）」は伝統的な五・七音の音数律に依拠しており、「大胆奔縦の自由詩」でないことは明らかであるから、本教材の鑑賞に際しこの朔太郎の主張を適用することは難しい。ただし、地方から上京してきた人間の故郷に対する愛憎という主題は極めて近代的なものであり、近代を生きる詩人としての切実な思いが表層の音数律を超えて滲み出ている、と理解することは可能であろう。また、犀星や朔太郎が詩人として最も活躍した大正時代は口語自由詩の全盛期である。文語詩であっても、それを超えるものを犀星の詩に見出そうとする朔太郎の批評からは、詩が新しく生まれ変わろうとする時代を生きた彼らの歴史が感じられよう。

出典

本文は「定本　室生犀星全詩集　第一巻」（冬樹社　昭五十三）によった。

大正七年九月、第二詩集「抒情小曲集」（感情詩社）。「小景異情」は「その一」から「その六」までの六つの詩編から成る。本教材では「その二」を取り上げた。「抒情小曲集」は三部構成で、「小景異情」は第一部の冒頭詩である。

初出は大正二年五月の「朱欒」で、そこでは「その六」とされており、詩集収録の際に配列が変えられた。（「参考」参照）

主題

故郷は遠くにあって思い悲しく歌うものであって、たとえ異郷の地で乞食になっても帰る所ではないという。故郷への愛憎を込め、心の中の故郷を思慕するとともに遠くの〈みやこ〉を帰りたい所として思慕する。

構成

前半（初め～二八六・5）
　ふるさととはどのような場所かを示し、たとえ異郷の地で乞食になっても帰るところではないと断定する。
後半（二八六・6～二八七・三）
　「ふるさとおもひ涙ぐむ」その心をもって、遠き都に帰りたいという願望を告げる。

指導上の注意点

●二八六ページ

問　冒頭の「ふるさとは」の句を、意味的に受けているのはどの行までか。

答　「ふるさとおもひ涙ぐむ」まで。

補　「ふるさとは」は、「遠きにありて思ふもの」であり、「悲しくうたふもの」でもあり、たとえ「異土の乞食」になったとしても、決して帰るところではない、と意味上は、つなげて理解することができるので、ここまでを前半部として把握させたい。

問　◉「帰るところにあるまじや」とあるが、理由として、どのようなことが考えられるか。

答　都で成功したいから、故郷に居場所がないから、など。

補　この詩の背景には、東京と地方の著しい落差がある。一般論としてでもよいので、都（会）と故郷の違いを想像させたい。

●二八七ページ

問　「そのこころ」とはどのような「こころ」か。

答　故郷に対する、離れていると涙が流れるほどいとしく恋しいという「こころ」。

補　涙が出るほど故郷が恋しいのだが、その思いを抱きつつ実際には「みやこ」に帰ろう

語句の研究

●二八六ページ

0小景異情　「小景」は日常生活の中で目に触れるちょっとした情景。ちょっとした眺め。「異情」は異にする感情、つまり「小景」にそぐわない感情ということになる。周りの景色とそぐわない、融け合うことのない自分の感情。ここでは故郷に対しての自己の感情の違和と理解することができよう。「小景」という景色と、「異情」という違和感とをつなげたところに犀星の詩の特色がある。

2悲しくうたふもの　ふるさとは、悲しくうたうもの。この「悲し」は、感情が胸に迫り、涙が出るほどの状態を表す語句である。また古語の「身にしみて、いとしい」という意味もこめられているであろう。初出誌「感情」に収められたときには、下に句点がある。

3よしや　たとい、仮に、という意味の副詞「縦」に、感動の助詞「や」がついたもの。不満足ではあるがやむを得ないと考えて放任・許容するさまを表す。もしかりに。たとい。万一。よしんば。次行「うらぶれて異土の乞食となるとても」にかかる。「よしや～とても～まじや」の一まとまりで作者の故郷拒絶の思いが示される。

4異土　異国の土地、という意味であるが、この場合は自分の故郷と異なる土地。異郷。

4乞食　「傍居」の意。道のかたわらなどにいて、また、家々を回って食物、金銭などを人に乞う者。最悪の場合を仮想した表現。

5あるまじや　あるまいよ。「まじ」は打消推量の助動詞、「や」は種々の語を受けて独語的詠嘆を表し、また、語調を整えるのに用いられる間投助詞。「感情」に収められたときには、下に句点がなかった。

6ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ　出郷して都にいっての自己を想像した部分。1・2行目に示された、遠くにいて思う「ふるさと」とつながる部分である。

●二八七ページ

1そのこころもて　「ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ」というこころをもって。「都」は東京を指すが、最終二行の「みやこ」は心に思い描く地であるとも考えられる。（「鑑賞」参照）

2かへらばや　「ばや」は自己の動作の実現に対する願望を表す。活用語の未然形に接

としているという、相反する心情を理解させたい。

問 **作者は「ふるさと」をどのように考えているのだろうか、話し合ってみよう。**

答 離れていると涙が流れるほどいとしく恋しい反面、現実の故郷にいるとうらぶれて乞食になっても帰りたくないところ。

補 ふるさとの相反する感情を話し合う中で理解させたい。主題を問うことにつながる。「ふるさと」への思いが一面的なものでないことに注意させたい。それぞれ対応する部分（4・5行）と（6・7行）を書き抜かせてもよいだろう。

鑑賞

本教材「小景異情」は六つの詩編から成るが、ここでは「その二」を抄出した。

「その二」の「ふるさとは遠きにありて」の詩は、故郷を詠んだ詩として現在でも多くの人に知られ口ずさまれており、遠く離れてしまった故郷はなつかしい……という思い詠んだものという風に捉えられているところがあるが、そこにとどまるものではない。「ふるさと」は遠くにあって思うものであり、悲しくうたうものだというのだが、なぜ「悲しく」なのだろうか。「ふるさと」は近くにあっては思えないということが背後にある。現実の故郷は犀星にとっては厳しく、だから異郷の土地で「乞食」となったとしても、おめおめと帰るところではないと拒む意志を示しているのである。実際に身を故郷においたとしても、「ふるさとは遠きにありて思ふ」ところにしかない。

「ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ／そのこころ」とは、都の夕暮にあってひとり「ふるさと」を思慕し、涙ぐむのであって、都にあっても心満たされてはいない。

「遠きみやこ」においても、帰りたいものだという想念の中にある「みやこ」なのであり、現実の都ではない。「都のゆふぐれ」という限定において、漢字で「都」と書かれているが、最後の二行のリフレインにおいては「遠きみやこ」となっているのは、現実の地としての「都」と想念の中の「みやこ」とを区別したいという意図を読み取ることも可能である。

従来「ふるさとは遠きにありて」の詩が、故郷で歌われたものか、東京で歌われたものか、二つの解釈がある。萩原朔太郎は「室生犀星の詩」（『日本』昭和十七年四、五月号）で作者の立っている場所は東京だとし、最後の二行に「都」が出てくる理由として（此所で故郷のことを「都」といっているのは、作者の郷里が農村ではなく、金沢市であるからである）と註をつけ、「都」の金沢へ帰りたいものだという意味に捉えている。その際、「室生犀星の詩」で引用した最後の二行のリフレインの表記は「遠き都に帰らばや」となっていて、ひらがなの「ふるさと」になっていなかった。初出の「朱欒」では、「遠き都にかへらばや／とほ続する。帰りたいものだ。この場合、都で夕方一人、故郷を思って涙ぐむような、そんな故郷に対する懐かしさと憧れを抱いたままで、都に帰っていきたいものだ、という意味になろう。

き都にかへらばや。」と漢字の「都」になっていて、「遠き」の方がひらがな表記の「とほき」と漢字表記の二様となっていて、詩集所収形ともども朔太郎の引用した形ではない。

久保忠夫氏は「その二」は金沢での作だとし、理由として第一、東京での作とするためには、「都」を東京、「みやこ」を金沢と分けて考えなければならない不自然さを伴うこと。第二、「都」と「みやこ」を分けて考えることも不可能ではないが、『抒情小曲集』時代に「みやこ」「都」が金沢を指した用例はなく全て東京を指し、金沢は常に「ふるさと」と呼ばれたこと。第三、「小景異情」は東京の小景に感じられた異情ではなく、金沢の小景に感じられた異情であること。第四、この詩は大正二年四月の作と推定されるが、このとき、犀星は金沢にいて、五月五日、東京に旅立つ準備をしていたこと、をあげている。この詩の成立についての明晰な整理となっている。

ただし従来、詩人が「みやこ」にいるのか、「ふるさと」にいるのかという点が問題にされてきたが、そうではなくいずれの場所にもいられない「遠き」ということが重要だとする宮崎真素美氏の見解が出されている。

どこへも心の置き所のない詩人のありようこそが、あり得べき安寧の場所を求めつつ、それをことばによって象ってゆくこと、それが詩篇創作のエネルギーに結びついているのだと考えたい。それは、詩人自身が実際にくり返した上京と帰郷の往復運動によってもたらされた感覚に裏打ちされているものであるかも知れない。詩篇のなかで、自分の位置がどこからも〈遠い〉場所にあるからこそ、この心の往き来が描き出せるのだろう。〈ふるさと〉もそして〈みやこ〉も〈遠い〉からこそ憧れ象ることができるのであり、創作の場を実在の場所に還元してしまうと、こういった中間的な不確実さが無視されてしまう。詩人が、「その人がこれぞと思う方をとればいい」という背景には、どこにも寄り添えない心象こそが詩篇の核であることを伝えているように思われてならない。

（〈遠き〉へむかう〈こころ〉――室生犀星「小景異情　その二」――」『愛知県立大学　説林』平成二十五年三月）

故郷金沢に身を置いて詠んだ詩と読めば、故郷の苛酷さを痛いほど感じて「ふるさと」を強烈に思慕した感情が受け取られる。しかし、こころの身の置き所は故郷を離れた「遠きみやこ」にある。ただし「都」が心安らぐ場所である保証はない。「かへらばや」という願望もまた想念の「みやこ」上に成り立つものと考えれば、宮崎氏の説は説得力をもつ。

久保忠夫氏は犀星から次のような返事を聞き出している。

「この詩はどこでおつくりになったのですか」というわたしの問に「このごろ中学校の教科書にのっているので、先生方からよくそういう質問が来る。ある人には『東京で』と答え、またある人には『金沢で』と答えてしまった。芭蕉の『閑（しづか）さや岩にしみ入蟬の声』の『蟬』と同じで、その人がこれぞと思う方をとればいいんですね……」と答えてくれた。（「ふるさとは遠きにありて　民衆詩運動の展開」『近代詩物語』昭和五十三年十月、有斐閣）

この犀星の答えに久保氏は諒承しないとし、鑑賞の領域から朔太郎と犀星の発言を除外すると述べているのだが、作られたのは

金沢だとする客観的状況からする見解は見解として押さえながら、「ふるさと」と「みやこ」が犀星にとってどのようなところとして歌われたのかを考えると、現実的には故郷も都も犀星には厳しい場所であり、遠く離れて思う中にしか「ふるさと」はなかったと読み取れる。

本教材は、故郷と都（東京）それぞれの場所に向けられた詩人の愛憎を読み取ることを内容上の主眼とするものである。従って、犀星自身が創作時にどちらにいたのか、という問題は、研究史上で争われたことがあるとはいえ、教室での鑑賞に深く関わるとは言い難い。また、実際の創作の現場と、詩篇内部の移動の力学の問題を混同しないことも重要である。

解釈の問題としては、久保忠夫氏（前掲）が述べる通り、詩人がどちらにいてもよいという説明は普通に考えて成り立ちにくい。末尾の「かへらばや」のリフレインが、今まさに都（東京）に帰ろうとしている様子を示す以上、少なくとも詩の後半においては故郷に身を置いている、とするのが自然な印象である。また、通常は故郷に「帰る」ものであるところを、都の方にこそ「帰る」のだ、という転倒の意味を適切に掬うためにも、故郷から都（東京）へ向かうという移動のあり方を前提とした方が読みやすいことは確かであろう。

この点について、末尾の「みやこ」が平仮名表記であるゆえに現実の東京を目指すのではない、という詩解（詩人がどちらに身を置いていてもよい、という読みに繋がる）も可能ではあるが、その場合、初出においては「都」と「みやこ」は書き分けられておらず、両者の書き分けが犀星の体系的な用字法とは言い難い点も念頭に置くべきだろう。特に本教材の収録形態においてこの詩は唯一の文語定型詩であり、五・七音のリズムを味読することが狙いでもあるので、表記の揺れに関してはリフレイン部であるために平仮名の表音性が活かされている、という観点や、「単調さを避けるため」（西原大輔『日本名詩選1』笠間書院、平成二十七）書き分けたという常識的な観点からの説明も有効であることを書き添えておきたい。

参考

本教材は、初出（「朱欒」大正二年五月）では、「その六」として掲載された。以下のとおり。

その六

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆうぐれに
ふるさと思ひなみだぐむ
そのこころもて
遠き都にかへらばや
とほき都にかへらばや。

・「定本 室生犀星全詩集 第一巻」 冬樹社 昭五十三

「小景異情」

その一

白魚はさびしや
そのくろき瞳はなんといふ
なんといふしほらしさぞよ
そとにひる餉(げ)をしたたむる
わがよそよそしさと
かなしさと
ききともなやな雀しば啼けり

その三

銀の時計をうしなへる
こころかなしや
ちよろちよろ川の橋の上
橋にもたれて泣いてをり

その四

わが霊のなかより
緑もえいで
なにごとしなけれど
懺悔の涙せきあぐる
しづかに土を掘りいでて
ざんげの涙せきあぐる

その五

なににこがれて書くうたぞ
一時にひらくうめすもも
すももの蒼さ身にあびて
田舎暮しのやすらかさ
けふも母ぢやに叱られて
すもものしたに身をよせぬ

その六

あんずよ
花着け
地ぞ早やに輝やけ
あんずよ花着け
あんずよ燃えよ
ああ　あんずよ花着け

「新らしい詩とその作り方」

この作は、私が都にゐて、ときをり窓のところに佇つて街の騒音をききながら「美しい懐かしい故郷」を考へてうたつた詩である。／誰でも都会に住む人人らは時をり私のやうに悲しげ

な目付をして故郷の温かい山河を想起して、そこに曾て営んだ平和な生活を胸に浮かばせるであらう。自分の家の庭や、庭の木や、幼少のをりに遊んだ草場や公園や夕暮の町の有様や、さては、楽しげな善良な自分らを愛してくれた親密な人人やを心に描いて、何一つ身に親しまない「旅」にあるやうな慌しく加之も冷たい都会を悲しく思ふであらう。いつの世も故郷は吾吾の胸に緑緑として燃えたり煙つたりしてゐる。夜はゆめにまで親密な山河に遊ぶことさへ願ふのは、人として為ければならない「感情の慰さめ」である。しかし自分は帰りたくない。自分は強大な生きた姿で此都会にありたい。自分が見搾らしくよし乞食となつてもかへつてはならない。／まこと故郷はただ遠方にあつて思慕するところである。かへつては最つと寂しく悲しいことが多いことだらう。自分はやはり此の都会にゐたい。大意はこの心持を体したものである。

参考文献

❊ 教師用

「日本近代文学大系39」鳥居邦朗　角川書店　昭四十八
「研究・露風・犀星の抒情詩」三浦仁　秋川書店　昭五十三
「定本　室生犀星全詩集　第一巻」　冬樹社　昭五十三
「室生犀星論」船登芳雄　三弥井書店　昭五十六
「室生犀星文学年譜」室生朝子他編　明治書院　昭五十七
「室生犀星評価の変遷」奥野健男　三弥井書店　昭六十一
「室生犀星研究」久保忠夫　有精堂　平二
「論集　室生犀星の世界　上」室生犀星学会編　龍書房　平十二
「室生犀星伝」本多浩　明治書院　平十二
「新研究資料現代日本文学　第七巻・詩」　明治書院　平十四
「室生犀星」三浦仁　おうふう　平十七
「室生犀星研究」高瀬真理子　翰林書房　平十八
「室生犀星」星野晃一　踏青社　平二十一
「室生犀星の詩法」九里順子　翰林書房　平二十五

❊ 生徒用

「〈新装版現代詩読本〉室生犀星」　思潮社　昭六十
「室生犀星詩集」　思潮社　平元
「室生犀星事典」葉山修平監修　鼎書房　平二十
「切なき思ひを愛す」室生犀星文学アルバム刊行会編　菁柿堂　平二十四